

【嘉数高台の戦闘①】

碎石場同然の嘉数戦場

K・S（当時十九歳）

歩兵砲中隊の陣地構築

私は昭和十九年十月に入隊した。その後三カ月は宜野湾国民学校で軍隊の教育を受けた。所属部隊は、石部隊三五九四歩兵砲中隊で、宜野湾村字大山の製糖工場に駐屯した。それから分隊編成が行われ、我如古部落のヒラマーチャー（平松）の右手の森で陣地構築に当たった。昭和二十年一月末であった。一月の空襲の時は、この陣地の構築中であった。我々は銃しか持つてなかったが、山に隠れて米軍機に向って銃を構えたものである。

二月に入ると、こんどは嘉数部落に移ることになった。嘉数部隊の後方の製糖小屋の近くに真志喜・大謝名方面に向けて砲陣地を構築することにした。この陣地が完成したのは三月十五日頃であった。それから、およそ二週間ぐらいいは弾薬や食糧を運び込んだ。

銃撃戦始まる

四月一日の米軍上陸には、発砲の命令が下るのをいまか、いまかと待ちかまえていたものである。私たちの陣地の上は、太鼓を打ちたたくように音高く揺れ動き、砲弾は雨のように降った。しかし、陣地が強固で厚みがあったので大丈夫だった。

四月三日には、米軍は真志喜の森の川の前方に戦車で隊列を組み、その間には数名で蛸壺のような壕を掘り、そこに入って嘉数に向けて銃を構えた。今まで、「全隊が上陸してから撃て」ということであったが、三日からは銃撃戦が展開された。おそらく、この合戦に最初に撃

ちこんだのは我々の部隊だと思う。陣地からは眼下に見おろすことができたので正確に撃てた。米軍の蝟壺壕にまともに当たったが、彼らは煙幕を張り、その日は終わった。

四月四日から戦火は激しさを加え、米軍の集中攻撃を浴びた。嘉数の山々は草木一本も残らず碎石場同然となっていた。米軍は戦艦・陸・空から激しく撃ち込んだので、三、四日間では山は真白くなっていた。

私たちの陣地は、入口から一方は弾薬を積み重ね、その片側は一列縦隊に通れる程度の通路になっていた。その入口近くに、まともに戦車砲を撃ち込まれ、五人の死傷者を出した。砲弾は人間に当たって不発であったが、最前列の家田上等兵が腹部を貫通され、二番目が太股をやられ、三番目は膝坊主、四番目の私は臍、五番目が足首をそれぞれやられた。前列の二人が即死、三番目は間もなく死亡、四番目の私と次の人が負傷した。もしこの弾が破裂していたら、陣地内には弾薬が積み重ねられていたし、全滅していたことであろう。前列の三人は腸がとび出し臓腑が血みどろにからみ合い、人間の姿とは思われなかった。私は自分の足がやられたことも知らず、この惨事に茫然としていたが、あとで気がついてみると、足の骨が折れた表皮だけ残ってよれよれになっていた。さっそく剣鞘を副木代りに当て巻絆で縛った。三番目の足をやられた人は、自分の帯剣で切断すると言って発狂して、死者たちが流した血の海の中で臓腑とからみ合い、あばれまわっていた。これが四月五日の午後三時頃のできごとであった。

それから浦添村当山の野戦病院に移された。当山部落の後方の自然壕であった。そこで軍医が副木を当て、手当をしてくれた。ところが、この野戦病院にいたのも二日ぐらいで、三日目の夜明け、棚原の野戦病院に移されることになった。この時は、防衛隊員に担架で運ばれた。防衛隊員は、ほとんど宜野湾近郊の人たちであった。宜野湾出身の防衛隊員の一人は棚原の病院で、私に面会にきて次のような事を語っていた。

「当山から棚原の野戦病院に負傷兵を運ぶ時、砲煙弾雨の中を担架に乗った本土出身の負傷兵が、あまり文句や小言を言うので、弾雨の最中であつたから、どうせこの兵隊は生きないだろうと思って、それよりは自分の命が大切と思つたから、崖下に投げ捨てて逃げた。君もそうされたのかと思つて心配だつた。」

その当時の防衛隊員もほとんど死んでしまつた。この棚原の野戦病院で一日過ごしたが、またそこを追われて首里の野戦病院に移り、そこに四日ほどいて、それから南風原の野戦病院に移された。

出典：『宜野湾市史』第3巻 市民の戦争体験記録 宜野湾市（1982）